

4月14日提示「報告書案」についての感想と一部修正のお願い等について

2015年4月22日 小出 薫

1. 全体としての感想

かなり簡潔なものとなっており、委員の発言と議論をすべて受けた上で、主として行政の立場で今後リスクコミュニケーションに携わるこれからの専門家用に事務局で編集されたものとなったという感想を持ちました。ご苦勞をされたことと思います。一方で、勉強会やWGの委員が所属する団体等の人々や消費者がこの報告書の趣旨を理解するには、かなり行間を読む必要があるなとも思います。自分たちの考えが反映されていないという反応も出てくるかもしれません。4月22日にこの報告書の Audience について再確認したうえで少し行間を埋める作業を致しましょう。

2. 一部修正の提案とお願いを2点だけ致します。

2-1

「3. 食品分野におけるリスク、(1) 食品分野におけるリスクを考える際の留意点」部分について

その6行目以降・7項目の順番を変更し、かつ第1項をもう少し書き込んだ方が食品特有の問題の難しさが分かりやすくなると思います。第1項目は重要なことを語っていますが、この簡素な表現で最初に来ると、不本意ながら枕詞として読み流されてしまうかもしれません。

*ここの7項目で言いたいことは、大きく分けて4点？有るのではないのでしょうか・・・

①第2項のフードチェーンのこと、②第7項の日本と海外（特に国際ルールに影響を与えている西欧型先進国）との食生活の違い、③第5、6項の未知の部分が有ること、

そして④、第1項、3項、4項で言うべきことは、・・・

食品は（完全な嗜好品を除けば）人体に多様な栄養素を供給することで人の生存に欠かせないものである。一方で、完全な異物や、病原性微生物の大量混入といった異常の無い正常な食品の栄養素であっても、また通常の調理や加工の過程でこれら栄養素間に起こる化学反応生成物にも、それらを過剰に摂取すれば健康上の問題を発生することが起こり得る。

だからと言って、そうした栄養素や2次的な生成物を嫌って、それを含む食品を適正量食べなければ、栄養不良という深刻な問題が発生する。

（例えば脂肪はしばしば悪者扱いされます。しかし脂肪は、構成する脂肪酸とその結合の仕方が実に多様な異なるトリグリセライドの集合体であり、それぞれの脂肪酸はどれも体の中で何らかの機能を果たしている。また脂肪や脂肪球被膜の摂取に伴って摂取できる重要な栄養素や生理物質も有る）

全ての成分について、健康上のリスクとベネフィットが解明されているわけではない。

また、好都合な成分だけをサプリメントや錠剤の形で摂取することが正しいとは言えない。

・・・といった内容ではないでしょうか。

食品事業者としてはここに、必要な栄養を提供しつつ過剰が問題となる成分を抑制する技術開発と言う役割の一つが有ります。

そして、これにも関係して、もう1点。

2-2.

「5. 関係者に期待される姿勢、（3）食品関係事業者」部分について

2行目、「経団連等では・・・」以降は少し修正が必要と考えます。リスクコミュニケーションの改革への事業者の積極的な役割が示されない中での、これまで繰り返されてきた一般的な、リスクと直接関係のない企業批判が続く印象があります。

ここではコンプライアンスという用語もあまり適切ではなく、はむしろ社会的責任という言葉が適していると思います。

良い事は積極的に、時に一線を越えて語る（ファディズムの議論の中で有りました）にも拘らず、一方で扱っている食品に関係する **Hazard** や、リスクとそれに対応する予防策等企業が独自の説明、広報等コミュニケーションを行うことに消極的である・・・これも大切な社会的責任の1つとして認識すべきである・・・とは、私も考えていますし、食品企業の集まりでも常日頃議論しています。

勉強会とWGの中で、マスコミや、消費者や、企業の問題についても様々に自由な意見表明や批判がなされました。その中で企業に対する批判としてフードファディズムの議論もあり、そのこと自体に異議を唱えることは有りません。

5行目に「消費者が誤った認識をするような情報を提供することは、・・・」とありますが、食品企業が、本当はリスクを考えなければならない成分を、危険が無いと主張するという方向で誤った情報を流した例は、私が知る限りでは有りません。繰り返しになりますが、有効性の根拠に乏しいものを誇大に語る「ファディズム」の例は有ります。また実質的な危険が無いのに、「念のため」あるいは「消費者の安心の為」回収することや、商品を廃版にすることへの批判も有ります。しかし、危険を過少に語ることは無いが、極めて珍しいと思います。

食品事業者の多くが今、食の実態を消費者や若い世代に理解してもらうための「食育」を積極的に行おうとしています。こうした活動は、日本社会でリスクコミュニケーションが今より効果的に行われる社会的基盤作りに役立つはずで。

リスクコミュニケーションを、すべてのステークホルダーが参画する中で、事業者がやるべきポジティブな行動なり姿勢と社会的姿勢をこの欄では示していくことが、生産的であると思います。

以上